優れた人材育成への取組み

サトーラシ

多種多様なカリキュラム学ぶ
二ヵ月間のモノづくり教育

㈱サトーラシ（本社＝東京都大田区南六郷。佐藤義則社長）では、事業継続の一環に当年度においても新卒採用をおこない、当該新入社員並びに中途採用者対象の人材教育制度に従ったテクニカルセンター（本部・児玉工場内）による同社事業の基礎修得を柱とする研修を二ヵ月間実施。期間中の終盤には“第3回STCグランプリ”と銘打った自らが組み立てたラジコンバギーによるレースも開催。主力需要先の自動車産業における電動化ニーズを視野とする原動力モーターの働きから、シャーシ（躯体）及び足回りなどと構造、それらにおける同社生産部品の使用箇所や求められる機能などを紐解く貴重な体験を積んだ。今後は、同社並びにねじ業界の更なる発展を担う戦力として、各配属先での実践及びステップアップのための研修等に取り組み、優れた人材の育成を図っていく方向である。

修了式のようす。挨拶する高橋テクニカルセンター長

同社では例年、本部・児玉工場の敷地内に設置したテクニカルセンターにおいて企業業態の早期把握並びに認知などサトーラシの一員としての自覚周知と成長を目的に、新入社員・中途採用者対象の人材育成制度に従い、ねじ一般から各種工作機械に関わる基礎知識・加工技術等の修得を内容にした独自の教育プログラムを導入している。その後は、国内の児玉工場（埼玉県本庄市）及び嵐山工場（埼玉県比企郡）の製造部門をはじめ各営業拠点などに配属されている。

令和6（2024）年度には、前記のテクニカルセンターに新卒者二名及び中途採用者を加えた計四名が入校。研修期間はコロナ禍が開けたことに伴い、以前と同時に4月初旬からの二ヵ月間（実質34日間）に設定。一層充実した内容の教育を積むことでの初期段階による人材育成の高度化を図るため、日常業務の遂行に必須な多種多様なカリキュラムが企画され、基本的な知識と技術などを確実に身に付けた。また、期間中には協力先企業における工場見学をカリキュラムに加えて材料、熱処理、表面処理、金型と、自社製造現場とは異なるもののベストパートナーの関係性を有し、競争力強化の一翼を担う優れたモノづくりの取り組みを学んだ。

去る5月24日には、当年度テクニカルセンターの総括となる修了式が午前に執りおこなわれたあと、午後からは同センター前（駐車場）の特設レース場にて自ら組み立てたラジコンバギーによる第3回STC（サトーラシテクニカルセンター）グランプリが催された。

修了式は、同センター教修室を会場に総務部の岩本佳士課長代理が司会進行。まず、高橋伸宣センター長が「この二ヵ月間は、初めての経験が多かったと思われます。その一つ一つは直ぐに必要、役立つ場合もありますが、そうではない科目がみられても、今後の仕事において関連性を備え、忘れずに、また自己復習をおこなって頂きたい。毎日の地道な積み重ねによって、ここで学んだことを各職場において高度化させていき仕事での有効活用のもとに、皆さんの更なる成長を願っています」と挨拶した。

そのあと、今年度生徒の柿沼翔氏、内林暖人氏、島田善紀氏、工藤一真氏の四名に対して修了証書とバッジが授与された。つづいて、入校生総括へと入り、個々がテクニカルセンターの趣旨をお浚いし、修得した知識や技術などの貴重な体験を活かしていく一頼もしい内容の抱負を語り、閉会となった。

第3回STCグランプリは昨年に続き、同センター研修のカリキュラムに取り入れ、生徒は前記の研修期間終盤の限られた時間内において、膨大で緻密性を備えた各部品を一つ一つ確認しながら組み立て作業に務めた。

この取り組みは、同社の主力需要先である自動車産業においての電動化推進の市場環境を見据え、入校生がこれからの業務で多種多様な部品生産に務めていくことを仮定し、早期からの基本的かつ幅広い知識等を得たモノづくりの意識付けや、姿勢の築き上げなどを目的にしている。各自は、電動化ニーズを視野とする原動力モーターの働きから、シャーシ（躯体）及び足回りなどと構造、それらにおける同社生産部品の使用箇所や求められる機能などを紐解くように学び、専門的能力を身に付けた。

出場ドライバーは前記の修了者四名、先輩スタッフなどを含めて合計八名が2グループに別れて、1グループ四名の編成で予選競技を特設コース6周でおこない、そのうちの上位二名が決勝戦に駒を進めた。決勝戦（10周）では、各ドライバーが鮮やかなコーナーリングテクニックなどを披露し、接戦の末に島田善紀氏が優勝のチェッカーフラッグを受けた。このほかの上位入賞者は、準優勝が工藤一真氏、第三位が笹本愛氏。

修了証書を受取る生徒達

STCグランプリ入賞者